

介助負担軽減を目指した重症心身障がい児の入浴補助具の検討

～多職種との連携を活かして～

株式会社アール・ケア 訪問看護ステーションママック総社 理学療法士 難波 諒

看護師 佐藤 美子

看護師 高坂 陽子

【はじめに・目的】小児在宅領域において、児を取り巻く環境を調整するには、医療的ケアや日常生活の支援から両親をサポートする看護師と、身体機能および活動面を支援する理学療法士の連携は必須である。今回、成長と共に変化する児の身体的特徴に配慮した入浴補助具を、看護師と理学療法士が意見を出し合い作成することによって、介助者と児の負担が軽減し、知見を得たため報告する。

【方法】症例は11歳男児、在胎38週、出生体重2326g、普通分娩にて出生した。生後14週頃に痙直型脳性麻痺と診断され、胃瘻造設と喉頭気管分離術を施行されている。大島の分類1点、現在、身長100cm、体重14kg、利用するサービスは、当事業所の訪問リハビリ週2回60分、訪問看護による入浴介助を週1回60分、ヘルパーによる入浴を週2回である。7歳の時に作成した入浴補助具は、衣装ケースに水を溜め、ネットと2本のベルトを縫い合わせたものを通し、ベルトは頭部と膝窩を支えていた。児はネット上に背臥位となり、一人の介助者は頭頸部を保持、もう一人は洗体などを行う二人介助で入浴していた。成長と拘縮変形の進行により、児の身体が衣装ケース側面に接触することが刺激となって、全身的な筋緊張の亢進が認められた。また2本のベルトは頭部と膝窩をのみを支えていたので、脊柱の彎曲部が落ち込み、側彎を助長している可能性があった。新しい入浴補助具の作成に当たって、両親及び多職種の意見を聴取した。両親は一人介助で行え、湯量も軽減しつつ、児の皮膚状態に合う柔らかい素材の物で入浴することを望まれた。看護師はより強固な頭頸部の保持をすることで、気管切開部へ水の浸入を防ぐことを望んだ。理学療法士は筋緊張をコントロール出来るように大きいサイズで、ネット上で背臥位になる従来までの方法を生かしつつ、かつ側彎を助長しないよう安定した姿勢を保持できるようにとの意見が出た。

【結果】既存の浴槽の縁にパイプにて四角形の柵を作り、従来の方法と近い形でネットとベルトを繋ぎ合わせたものを通した。ネットは児の皮膚状態に合わせ、目が細かく柔らかいものを使用した。頭部と頸部にベルトを二本通すことで保持を行い、側弯部には幅広のベルトを使用し、入浴時の側弯部の負担を軽減させた。またベルトの長さを延長させ、介助者の椅子を内容物があるように工夫することで、浴槽下から30cm程度の湯量で納めた。

【結論】介助負担軽減を目的に、成長に伴って不適合となった重症心身障がい児の入浴補助具を、関連職種と連携を図りながら改善を試みた。その結果、入浴時の児の筋緊張は軽減し、介助負担も軽減することが出来た。

【倫理的配慮・説明と同意】この報告はヘルシンキ宣言に基づき行われた。対象者家族へ報告の説明を口頭及び書面にて十分に行い、同意を得ている。また発表にあたって開示すべき利益相反関係にある企業等はない。